

| 学校評価目標 | 重点目標と評価 | 【中間評価】 | 【最終評価】 | 個別 総合 | 総合 総合 | 評価基準 |
|---|---|--|---|----------|----------|---|
| | | | | | | |
| 新しい時代を生き抜く力を持った生徒の育成 ～自己肯定感を高め、進路目標に向かって主体的に学ぶ生徒の育成～ | 1 学びの環境を整備し、生徒の能力を最大限に引き出す。 (1) 物理的、精神的環境を整え、生徒の心身の健全な成長を支援する。 (2) 進路指導（＝キャリア教育）体制を再構築し、生徒・保護者・地域の満足度を高める。 (3) 地域の人的・物的資源を活用しながら生徒の挑戦を支援し、生徒の希望の実現に努力する。 | ・本年度もコロナ感染防止対策のため、学期の式辞等リモートで行っている。 ・計画書において、キャリア教育に関する体験活動が体系的に各学年実施され、生徒が適切な進路選択を行っている。また、学年毎に「進路だより」を発行し、生徒、保護者の意識の高揚に努めている。 ・新学習指導要領対応の新教育課程が完成し、それに向けた各教科・科目の授業改善、学習評価等の準備や大学入試共通テスト等に対応した教育課程の更なる改善を行っている。 | ・新型コロナウイルス感染防止による行事の精選を検討しながら、学園祭では、生徒会が主体のかつ能動的に、全校生徒へ呼び掛け、ソーシャルディスタンスを保った学校祭を開催し、修学旅行は北九州方面日程等にて実施した。 ・GSWの活用による授業実践を通して、生徒一人ひとりの進路実現に必要な学力は概ね身につけている。新教育課程の実施、学習評価の検討を行い実施している。また大学共通テストへの対応、入試体系の変更について生徒保護者への指導体制の共有化を図っている。 ・新型コロナウイルス感染拡大予防対策として、校外での社会貢献活動が出来ない現状であるが「マルチメディア」への放送、五福とプロジェクトの活動や東区役所主催の協働プロジェクトに参加等、現状を確認しながら、出来る範囲での活動を行っている。 | B | B | A 当初の見込みを超える取組を行うことができ、目標を上回る達成状況である。 |
| | | ・生徒の学力向上・課題解決のため、ICT機器（グループワークスペース）を活用した授業に取り組んでいる。 ・特別活動、CCT（総合的な探究の時間）については、各学年の目標にそって、地域の課題やテーマ毎に産官学の協力の下に講師、助言を行っていただき、地域課題から生徒の探究活動につなげている。 | ・9月14日(水)に中国銀行西大寺支店より行員をお招きし講演会を開催し、生徒へ、金融に関する知識向上を図ることが出来た。また、9月29日(木)西大寺小学校にて租税教室の開催と12月に金融金融アドバイザーの講演会も継続実施した。 ・国際交流関係では、イングリッシュキャンプは校内にて2日間の日程で実施し、英語コミュニケーション能力の向上と異文化理解を図ることが出来た。また、近隣専門学校等からの外国人を講師に招いた異文化理解講座をオンラインにて実施した。 ・主体的、対話的で深い学びを実現させるために、OJTチーム研修を継続開催し、学力向上・魅力ある学校づくりについて「よくする会」を開催し魅力創りに取り組んだ。 ・「1日1冊」の読書活動（10CT活動）にて、地場社会の課題解決に向けた取組を実践し、本発表を、大学教授、企業関係者、地域関係団体を講師に招き実施した。 | B | B | B 当初の見込みどおりの取組を行うことができ、ほぼ目標どおりの達成状況である。 |
| | | ・コロナ禍であるが、オープンスクールを開催し中学生に本校の魅力を発信することができ、今後は、保護者対象の学校説明会、学校説明会を開催する予定である。 ・アドミッションポリシーをHP等に公開している。 ・ツイッターを開設し、校内の様子をタイムリーに発信し、魅力づくりを行い始めた。 | ・オープンスクールを8月19日(金)に開催し、中学3年生に本校を紹介することが出来た。10月1日(土)に中学生、保護者対象の学校説明会を開催した。10月25日(火)に中学校教員対象の学校説明会を実施し、中学校長へ伝達し、機会を待たずに、校外向けの学校紹介動画をYouTubeに配信することが出来た。 ・スクールポリシーを作成し、本校の育てたい生徒像を明確に示している。 | B | B | C 当初の見込みの取組を行うことができず、目標を上回る達成状況である。 |

| 該当する経路・学年等 | 具体的目標 | 具体的計画 | 達成基準 | 中間期 | | 年度末 | | 学校関係者評価 | | | | | | | |
|------------|-------|--|---|---|----------------|------|--|---------|---|---|--------|-----------------------|--|--------|----------------------|
| | | | | 達成状況 | 備考 総合 評価 | 達成状況 | 備考 総合 評価 | | | | | | | | |
| 1 | 教務課 | ○新学習指導要領の実施に伴って、必要な整備(内規、評価など各種業務)を行う。 ○状況の変化に対応し、学習環境を整える。 | ○新教育課程への移行に伴う内規や評価方法、各種書類の修正、教科書選定などの関連業務を正しく行う。 ○状況の変化に対応し、学習環境を整える。 | ○新教育課程の実施に伴う必要な整備について、R4年度中に完成する。 ○「学校はコロナ禍でも、学習活動や…」の回答の「よくあてはまる」が45%を上回る。 | B | B | ○実際の新教育課程での評価を行った学年から出て問題点を確認し、教科主任、教育課程検討委員会のメンバーと話し合いを行い、評価の方法などについて方針を整理し、つづいて必要な業務を完了し、学期末から運用することになり、今後、さらに検討が必要になれば、問題点を把握し、より良い方向に進めるよう努めていきたい。 ○教科書選定等必要な事務作業については、各係長を中心に滞りなく行われている。 ○新教育課程に関する内規の追加・修正については、各係長と協力して取り組むことが必要である。 ○中間期以降、学級閉鎖等によるオンライン授業の実施については、先生方の協力により円滑に実施できている。アンケートの結果は今後集計する予定である。 | B | B | ○新たな提案の分析については、今後評価を行った後に該当学年より問題点を出してもらいながら検討すること。 ○重要課題として、実態に評価を行っている学年だけでなく、学校全体として新課程の評価について考える必要があると思われる。 ○教務課全員で作業の内容を把握し、お互いが補えるようにしていくことができればと思う。 ○評価については、より良い方向に持って行くために他校の情報も仕入れつつ、本校の実情に合ったものも活用し、改善するための取組を行っている。 | 妥当である。 | 観点別評価について適切な評価に検証を行う。 | | | |
| 1 | 進路指導課 | 適切な進路情報を提供し、受験に対応できる確かな学力を定着させる。 進路選択に関する基本知識や、多様な多様な入試制度・入試の変更点等タイムリーな情報提供を行うとともに、早期からの進路意識の高揚を図る。 学習活動を中心とした生活習慣の早期確立を図り、実力調査、校外模試、補習授業、土曜講座を通して入試や就職試験に対応できる学力の定着を図る。 | 学年集会、CCT、LHR、また面接や懇談を通して1人1人情報提供を行い、生徒が希望する進路の実現を可能にする。 進学や就職に対する幅広い視野や将来に対する展望を持たせ、早期からの進路意識の高揚を図るため、「進路便り」を各学年年間10回を目標に発行する。 学習活動を中心とした生活習慣の早期確立を図り、実力調査、校外模試、補習授業、土曜講座を通して入試や就職試験に対応できる学力の定着を図る。 | ○新教育課程の実施に伴う必要な整備について、R4年度中に完成する。 ○「学校はコロナ禍でも、学習活動や…」の回答の「よくあてはまる」が45%を上回る。 | B | B | 2年生は模試や実力、学習実態調査などの行事に加えて細かい情報まで進路通信として発信できているが、1年生の情報発信の回数を増やす工夫が必要である。(現在2号、同時期昨年9号、一昨年5号) ・1・2年生の学習時間は目標に届いていない。2年生は4月より減少している。(平均125分、国語138分、69分/目標180分) 1年生は例年に比較して少ないので(普通科、昨年-24分・前年-5分)早急な改善が必要。3年生は進年度と比較すると多い。(普通科170分昨年・20分、3年前+45分) 最後の目標3時間にはもう少しである。 3年生は全体として国立志向が強く、この調子で学年全体(普通科)共通テストに向けて士気を高めていきたい。 | B | B | 「進路便り」としての形式ではないが、集会やSHRでは必要不可欠な進路関係の情報は発信できていると考えられる。 1年生は中学校生活の大半がコロナ禍であり、学習習慣が定着しないまま入学してきた可能性もある。 現在の2年生は早い時期から関心・関与には届いていない。また情報は前回より大きく減っている状態である。 1年生については入学当初より学習時間が伸びず、回を追うごとに減少している。 普通科、国際情報科の生徒の共通テストの出願率は97%であった。 また、民間企業への就職希望者は全員内定をもらうことができた。(8名) | B | B | 学年の進路指導課の教員が分担して行う。 学習時間の確保については、教科による課題の工夫や、担任の先生による保護者へも指導していただいている。改善のためには外部講師による啓発や他校のデータや成功事例等による情報集めて生徒に刺激を与えたい。 学年の進路指導課の教員が分担して行う。 | 妥当である。 | 保護者を対象とした進路情報の作成を行う。 |
| 1 | 生徒課 | 学校内外での諸活動を通じて、生徒が豊かな人間性や社会人として必要な資質を身につけるための拠動を行う。 | TPOに応じた態度の醸成を通じて、公共心豊かな社会人としての自立に必要な資質を身につけるための拠動を行う。 ・エビデンスを明示した論理的な対話により、交通法規も含めたコンプライアンスの問題を高めていく。 ・生徒会活動などの特別活動や部活動に、本校の定めた活動目標や方針に基づきながら効果的に取り組ませ、心身の健全な成長を促す。 | 1スクートなどの制服の着こなしや髪型などの身構えを整えられる生徒、積極的に挨拶できる生徒が昨年より増加している。 2.重大な交通違反や事故の件数が0となり、かつ学校自己評価アンケートにおける質問「先生はいじめや生活指導上の問題を見逃さずに対応している」「社会人としてのマナーやルールを学習する機会がある」の生徒の肯定的回答が90%以上になる。 【昨年度 重傷を伴う事故0件、肯定的回答94%、84%】 3.学校優先の意識を持ちながら、特別活動や課外活動に積極的に参加できる生徒が増加している。 1及び2については、Google Workspace for Educationを使用したアンケートに対し、年度内に改善したと回答する教員がそれぞれ60%を超えている。 | B | B | ・模範スクートの短い生徒は、かつどのように校内外でみかけなくなり、模範的な挨拶を維持できている。服装の指導は教員の発覚を大切に、高校生以上の基準に指導しており、深刻なものは見られない。挨拶については、年々低減してきている傾向はあるが、きちんとできる生徒は多く、生徒会も意識が高い。家庭教師や部活動における指導における態度の育集による模範と考えられる。 ・重大な交通違反や事故はない。しかし、特別指導の件数(昨年より増加している。その中にいじめに絡むる事案も含まれる。例年)に比べて減少傾向にあり、三つない運動)に反する事案、3年生2学期の事案、公然わいせつに相当する事案などが指導件数の中に含まれ、指導が徹底している。 ・学校安全においてウィズコロナに早々に移行した他校もある中、本校は昨年までに近いレベルを維持しているが、生徒会執行部をはじめ一般生徒も規則を合理的に受け入れている。部活動はコロナ禍により制限が多い中で、多くの部が校内ルールを遵守しながら運営されている。 | B | B | ・教壇前時間と努力を注ぎ、スクートの仕様を変更したが、それは教員の服装指導に力を入れたことにより、チームでの対応が欠かれない。生徒会、学年間いじめ防止の指導は教員のフロンティアに任せざるを得ないという認識に達している。生徒指導全般的には教員の優先順位の高い職務だという認識の醸成が十分にできていない面がある。 ・問題行動は未然防止が理想だが、生徒の内面での把握は難しく、簡単なコミュニケーションだけでは、現実に問題行動が発生した後は勝負になると考える。当事者には丁寧に指導し、悪犯行為を繰り返さないことはもちろん、個人情報に配慮しながら、悪犯の周辺にいる生徒も、自ら問題として考えさせるような働きかけが必要である。 ・いじめ防止対策推進法に象徵されるように、対話による指導が十分にできている部分と、対象生徒が多すぎるために、できていない部分があると考えられる。悪犯が複数いる場合、人手は必要である。教員集団の年齢構成も重要である。 | 妥当である。 | 粘り強い指導を行う。 | | | |

| 達成す べき 目標の 番号 | 課・学科・ 学年等 | 具体的目標 | 具体的計画 | 達成基準 | 中 間 期 | | 年 度 末 | | 学校関係者評価 | | | | | |
|------------------------|--------------|-------|--|---|--|---------------|-------|--|---------|----------|---|---|-------|-------|
| | | | | | 達成状況 | 個別 評価 値 | 達成状況 | 個別 評価 値 | 結果の分析 | 改善のための方策 | 評価の 妥当性 | 改善の方 策の適切 さ | | |
| | 1 | 厚生課 | ・校内美化に力を入れ、教育環境の整備に努める。 ・生徒の心身の健全な成長を支援する。 | ・教室環境を整備するとともに、清掃状況をチェックし、トイレ清掃を徹底する。 ・教職員が体調不良者への対応を適切に行うことができるよう、研修や情報共有の徹底を図る。 | ・学校自己評価アンケートで「校内美化が図られ、落ち着いた教室環境が整っている」の教員と生徒の肯定的回答が上昇する。(R3年度 教員81.8%、生徒74.7%) ・学校自己評価アンケートで「怪我や体調不良の場合に適切に対応してくれる」の生徒と保護者の肯定的回答が95%を維持する。(R3年度 生徒96.7%、保護者95.8%) | B | B | ・「校内美化」に関する学校自己評価アンケート結果は、 教員77.8%(-81.8)、生徒75.9(-74.7%) 重点的にお願しているトイレの清掃、教室の環境整備等については概ね良好であると思われるが、廊下や階段・廊下など掃除時間に入ることが多い場所や教員入当りの担当が多い場所での清掃に留意している場面がある。 加湿器、サーキュレーターは予算的にも潤沢で、適宜更新・増設できている。感染症対策に取り組んでいる。 ・体調不良者への対応についての学校自己評価アンケート結果は、生徒97.1%(-96.7%)、保護者91.2%(-95.8%) ・体調不良の生徒への対応は適切に行っている。保健室、学年回、担任で連携を密にして連絡網の無いよう情報共有が出来る。また、保護者への連絡も昨年までと同様に適切に行い、生徒、保護者に対して安心感を与える対応が出来ていると思われる。 | B | B | ・校内では、トイレの改修が少しずつ進んでおり、きれいなところをきれいに使おうとする気持ちが向上すると思える。しかし、生徒のアンケート結果では数値は横ばいであるにもかかわらず、教員は清掃や整備が行き届いていないと感じており、実際にはそのような場面があるのも事実である。 ・コロナ禍の中で日常生活・学校生活における様々な制約が心身の健康に対して悪影響を及ぼしているが、コロナ感染の状況変化に合わせ、保健委員会からの呼びかけや健康観察実施者への対策を生徒主体で行っており、生徒の数値も良好である。保護者の数値の低下は、長引くコロナ禍での出席に関する不満等も含んでいるのではないだろうか。 | ・老朽化した施設の改善が必要である。しかし急ぎな改善は望めないため、生徒教員でできることを考え、整美委員会の活動を活性化することを中心に、全校生徒に清掃活動の徹底と、校内美化の意識向上を図りたい。 ・コロナ禍においても、教員、生徒に負担が増大する中で、安心できる学校生活環境を作っている。保護者からも十分な理解と協力が得られるよう連絡を十分に取っており、生徒の心身の健全な成長をサポートできる体制を確立したい。 | 妥当である | 適切である |
| | | 図書課 | ・図書館を活用した探究活動の充実と読書に親しむ態度を育てる。 ・視聴覚 情報処理関連機器の活用率を向上させる。 | ・図書委員会活動の充実と、授業での図書利用を促進し、読書への関心を深める。 ・継続した情報向上と機器の整備・保守により利便性を向上させる。 | ・1学期の貸し出し冊数2381冊(昨年2974冊)、3冊以上借りる生徒32%、図書館利用時間60時間以上、貸出冊数が5,500冊を超える。 ・3冊以上借りる生徒数が60%を超える。 ・ChromebookをはじめとするICT機器メンテナンスの最新情報提供を年に5回以上行う。 | B | B | 12月末現在(4月から7月間)・授業・CCT-LH Rでの図書館利用時間数が185時間、貸出冊数が5,488冊。 ・3冊以上借りる生徒数が60%。 ・ChromebookをはじめとするICT機器メンテナンスについてはよく回されている。 ・普通教室の物品点検は月1回できているが、特別教室までは至っていない。準備のフロムブックの保守はできており、また、共用のPCも更新できている。 | B | B | ビブリオバトルや弁論大会、百人一首大会などイベントがある度に国語科の先生方と協力して図書館利用と本の貸出を勧めた結果、2学期後半から好転した。図書委員によるセレクトブック(読書推進活動)の効果もあって ・周知のための情報提供なので一読いただければよい工夫したい。 | 今年度はClassroomを通じて司書による本の紹介を頻繁に行ってきた。また図書館内のテーマごとにディスプレイをしたり図書館外にも本を並べるなど生徒に本が届く工夫を凝らした。しかし、放課後の生の図書館利用状況を見ると、課題や勉強をしている生徒が多く、本を読んでいる生徒は少数である。1、2年生が全員クロムブックを所有するようになり、アプリを使って無料の本を読む生徒も増えてきている。電子本もよいが、紙の書籍の良さをもっと生徒に伝えられるようにしなければならぬ。 ・周知のために時間を割いたり、点検に戻る人員を増やしたりする。 | 妥当である | 適切である |
| | 1 | 教育相談室 | ・心に悩みを持つ生徒やその保護者が安心して相談できる環境の整備に努める。 | ・休みがちな生徒・不登校生徒・保健室利用者の情報を的確に把握し、必要に応じて生徒課とも連携し、チームで迅速な対応をする。 ・情報把握の手段として、「気づきシート」を積極的に活用する。必要に応じてアセスメントシートを作成し、対応の課程を的確に把握する。「気づきシート」は改訂を加え、生徒について多面的に把握できるようにする。 ・要支援と判断された保護者に対して、積極的な情報提供に努める。 ・思春期相談の開催について、保護者へはメール配信で、生徒へはGoogle Workspaceで周知する。 | ・月に1回以上、情報共有のための会議を開く。提案された対応策については、担任等に迅速に伝達する。 ・月に1回以上、相談室から学年回への情報共有を行う。これにより休みがちな生徒・不登校生徒・保健室利用者の情報が気づきシートに蓄積され学年の中で共有される。 ・ICTを通して周知することにより、学校自己評価アンケート「悩みを気軽に相談することができる」の肯定的割合を75%以上とする。(R3年度生徒78.9%、保護者75.0%) | B | B | ・月に1回係会議を開き、各学年の係や保健室からの情報を共有し、生徒の状況を確認しながら、対応策を協議している。 ・相談室から気づきシートへの情報の更新を行い、情報共有を充実させることができた。気づきシートの内容を回覧している学年もある。 ・不登校傾向の保護者への支援を行っている。 ・思春期相談の開催について、保護者へメール配信で周知を行っている。また、西大所高校のホームページに教育相談室の内容を更新した。 | B | B | ・気になる生徒の情報共有は気づきシートを通じて定着しつつある。生徒指導の情報が把握できるので、参考になっている。 ・思春期相談は11月末現在26件で1年生15名、2年生7名、3年生4名の利用だった。26件の内、保護者の相談は18件で生徒より保護者の利用が多かった。相談件数は昨年度(39件)より少ない。 ・気づきシートに生徒課の生徒指導状況も関連できるように改訂した。生徒把握の参考になっている。 ・不登校傾向の保護者への支援を行っている。 ・思春期相談の開催について、保護者へメール配信を活用し周知した。 ・自己評価アンケートの「悩みを気軽に相談することができる」の肯定的割合は、生徒78.7%(昨年78.9%)、保護者76.6%(昨年75.0%)であった。 | ・思春期相談の生徒利用を促進するため、クラスルームでの連絡の回数を増やす。 ・ストレスをコントロールするためのアドバイスを発信する。 | 妥当である | 適切である |
| | | 普通科 | キャリア教育の推進を通して、各学年の段階に応じ、人生設計の一部としての進路意識を育て、生徒一人一人の目標達成のために取り組む力をつけさせる。 | 進路指導課・学年・担任・教科と連携し、LHR・CCT・担任面談を通して進路(学習)への意識を高め、進路を見据えた学習活動の充実に向け働きかける。特に、1年次の文理選択LHRを科集会として行い、将来を見据え2・3年時にふれない選択をさせる。 | 学年回・進路・教務課と連携して日程調整をして、夏休み前・LHRで科集会を持ち、文理選択を説明する。 ・学校自己評価アンケート「進路に関する情報が適切に提供されている」の項目のマイナス評価の割合が5%以下【R3年度5.8%】 | B | B | ・科集会については実施できていないが、COTを通じて文理選択について意識づけをしたり面談を通じて、成績だけではなく生徒の進路志向による文理選択ができる。 ・CCTを通して文理選択について意識付けたり面談をしたりして、成績だけではなく生徒の進路志向による文理選択ができた。学校自己評価アンケート結果については1年生のデータのみの結果で「進路に関する情報が適切に提供されている」の項目のマイナス評価の割合が2.9%となった。 | B | B | 新教育課程に合わせた文理選択については、生徒の進路意識に合わせて説明ができています。各大学公費の受験科目をみて教務や各教科と協力しながら適切な教育課程の設定をしていく必要がある。 | 各大学公費の入試科目を参考にしながら、生徒が自分の希望する進路に向けて主体的に学習に取り組めよう、教育課程の細かな見直しを行っていく。 | 妥当である | 適切である |
| | 1年 | | 家庭学習習慣を定着させ、学習を中心に据えた基本的な生活習慣の定着を図る。その際chromebook等のICTの効果的な活用を適宜行う。 | 普通科と国際情報科においては、授業中の学習スタイルを定着させ、週末課題等も活用し週あたり一日平均の家庭学習時間を3時間以上確保させる。商業科においては各種検定の取得に向け、計画的・自主的に学習に取り組ませる。 | ・普通科・国際情報科では家庭学習時間の定着が図られ、週あたり一日平均の学習時間が3時間以上の割合が30%以上となっている(R3年度 22%) ・商業科は検定合格率が85%以上となっている(全商検定合格率 R3年度 79.3%) ・chromebook等のICTの活用については先生方の尽力で効果的な活用を適宜行うことができる。 ・家庭学習習慣の定着については、学習実態調査によると、普通科・国際情報科での3時間以上学習時間を確保している生徒が4月で21.3%、6月で19.8%という状況であり、担任面談、教員面談等を行うなどして継続して指導をしていく必要がある。 | B | B | クロムブック等のICT活用による基本的な生活習慣の定着については、担任の先生方がクラスの実情に合わせて柔軟に活用し効果もあげている。家庭学習時間の確保については、10月調査では3時間以上学習している生徒(普通科・国際情報科)が14.5%(前年16%)と達成基準の半分未満であった。 | A | B | 家庭学習時間の確保については、教科担当やクラス担任等、多の手段でアプローチを試みているが現在のところ改善が見られていない。課題の提出状況については、教科、クラス等で若干のばらつきや提出できない生徒の固定化がみられるものの、取り立てて悪い状況ではない(課題への取り組み方は改善されている部分が見られる)。 | 細かな指導にも関わらず、現段階では改善がみられていないが、特効薬的な方法は無いと考えられる。週末課題等の分量の調節や行事(定期考査、実力考査、校外模試等)に合わせた雰囲気づくりを行うとともに、進路指導(志望の具体的なイメージづくり)とリンクした書きぶりや学習する意義を確認させる指導も強引く行っていく。 | 妥当である | 適切である |

| 進路指導 目標の 番号 | 課・学科・ 学年等 | 具体的目標 | 具体的計画 | 達成基準 | 中間期 | | 年度末 | | 学校関係者評価 | |
|-------------------|--------------|--|--|--|---|---|---|--|---------|--------|
| | | | | | 達成状況 | 個別評価 | 達成状況 | 個別評価 | | |
| | 2年 | COIにおける探究活動を通して、課題解決・進路実現に向けて主体的・自主的に取り組むことができる生徒を育成する。 | ○地域の人的・物的資源等を活用し、課題解決に向けて効果的に取り組む指導を行う。 ○探究活動や面談を通して、自らの進路や夢(目標)について考えさせる。 | ○進路希望調査においてその他(多くは未定)の生徒が10人以下となる。 【現状】1年次の第2回進路希望調査ではその他(多くは未定)が1名であったが、第3回では15名に増加している。 ○探究活動において、2チーム以上の生徒が外部の発表会に参加する。 【現状】過去2年はそれぞれ1チームが外部の発表会に参加をした。 | ・第1回進路希望調査のその他(多くは未定)18名(商16/79、音2/159)、第2回進路希望調査は11名(商10/79、音1/159)と減少傾向にある。担任による面談、進路通信などの細やかな指導により進路が定まつつある。 ・探究活動について、現在各グループが外部での発表を希望しており、探究フォーラムやBelvelに参加予定である。1学期の最後の授業(8/28)から2学期最初の授業(9/13)まで2か月以上のプランがあり、再始動し手早くできるか不安はあるが、把握しているだけでも夏季休業中に10グループ以上がインタビュー活動やアンケート活動など自主的な活動を行っている。校内外の発表に向けてしっかりと指導をしていきたい。 | 第3回の進路希望調査は1月に行われる予定である。探究活動が進捗を考えたこととなった生徒は50%程度である。 探究フォーラム、探究活動プレゼンテーションにはそれぞれ2チームが出場する予定となっている。 | 探究活動と進路が結びついている生徒は多くないが、度重なる担任の面接指導により、進路希望が明確になっている生徒は増加をしてきている。 | 探究活動と進路の両方に興味を持てる生徒は多くないが、度重なる担任の面接指導により、進路希望が明確になっている生徒は増加をしてきている。1年次からの継続的な活動が必要である。 | 妥当である。 | 適切である。 |
| 1 | 3年 | 進路実現に向けて、適切な進路指導を行い、生徒の能力を最大限に引き出し、進路目標を実現させる。 | 進路情報の提供、個に応じた面談、COIや授業における進路学習、保護者と教師の連携 | ・学校自己評価アンケート「進路について、担任や進路指導の先生が相談にのってくれる」に対して全科生徒の肯定的評価が90%以上になっている。【R3年度3年次 肯定的評価91.1%】 ・国立大学現役合格者(普通科・国際情報科)が延べ40名以上になっている。【R3年度39名】 | ・アンケート・国立大学合格者は年度末に判明するが、生徒は進路についての相談や質問を積極的に行っており、今までの進路指導の成果が出ている。6月の進路志望調査における国立大志望者は、音100名、国22名で昨年度よりも多く、意識づけを含めた下準備はできている。 ・国立大総合型については、指導の割り振りし、指導体制はできている。国立大進路総合型及び学校推薦型は学年年面を中心として割り振りを行い、指導にあたってきた。R4/12/10現在で、国立大総合型OT(無償)合格者4名【昨年4名】、国立大進路総合型OT(無償)合格者11【昨年9名】である。 ※今後1月に隔年判明する合否状況に関しては、「昨年ではなかったOT有総合型1次合格者がいること」模試のデータから、OT有学校推薦型選抜や一般選抜において合格可能性がある生徒は昨年度より多いことから、例年を超える実績を残せる可能性が高い。最後まであきらめない指導をしたい。 | ・左記アンケート(生徒)の肯定的割合は97%であった。親身になって生徒と向き合ってきた結果であった。 ・国立大学合格者は年度末に判明するが、11月の進路志望調査における国立大志望者は、音88名、国15名で昨年度よりも多く、生徒への意識づけ及び準備はできている。国立大進路総合型及び学校推薦型は学年年面を中心として割り振りを行い、指導にあたってきた。R4/12/10現在で、国立大総合型OT(無償)合格者4名【昨年4名】、国立大進路総合型OT(無償)合格者11【昨年9名】である。 ※今後1月に隔年判明する合否状況に関しては、「昨年ではなかったOT有総合型1次合格者がいること」模試のデータから、OT有学校推薦型選抜や一般選抜において合格可能性がある生徒は昨年度より多いことから、例年を超える実績を残せる可能性が高い。最後まであきらめない指導をしたい。 | 国立大の総合型と学校推薦型の口頭試問及び小論文については割り振りして、進路実現に向けて指導を進めていく。その後の、進路指導の時間や面談で指導していただきたい。 面接も、担任・学年面年中心にしっかりと指導した。また、他学年の先生にも協力をお願いした。その結果、多くの生徒は自信をもって臨むことができた。これらが今回の良い結果を残した要因である。また、総合型と学校推薦型に関する資料を調べ、次年度に引き継ぐことも必要になってくる。 生徒に対しては、幅広い視野(地元だけでなく県外)をもたせる面談や個別指導を行うことも重要になってくる。危機感が強い生徒も存在するので総合型になった際のケースもあわせて、総合型と学校推薦型に関する資料があまり残っていないため、経験が少ない教員が指導するに苦勞する点も課題としてあげられる。昨年度は中期と後期合否合わせで1名だった。コロナ禍では特に最後まで粘る指導が必要である。 | 教員に対しては、大学説明会にも多く参加してもらうなどして総合型と学校推薦型の知識を増やしてもらいたい。その後の、進路指導の時間や面談で指導していただきたい。 面接も、担任・学年面年中心にしっかりと指導した。また、他学年の先生にも協力をお願いした。その結果、多くの生徒は自信をもって臨むことができた。これらが今回の良い結果を残した要因である。また、総合型と学校推薦型に関する資料を調べ、次年度に引き継ぐことも必要になってくる。 生徒に対しては、幅広い視野(地元だけでなく県外)をもたせる面談や個別指導を行うことも重要になってくる。危機感が強い生徒も存在するので総合型になった際のケースもあわせて、総合型と学校推薦型に関する資料があまり残っていないため、経験が少ない教員が指導するに苦勞する点も課題としてあげられる。昨年度は中期と後期合否合わせで1名だった。コロナ禍では特に最後まで粘る指導が必要である。 | 妥当である。 | 適切である。 |
| | 総務課 | ・「総合的な探究の時間」等の充実を通して生徒の地域貢献意識や自己肯定感を育む。 | ・各科、課、教科、COI運営委員会との連携を深め、生徒の活動が充実できるように連携できる機関や人的資源を開拓し広げていく。 ・ルーブリックを用いた活動と評価を連携させていくことにより、生徒自らが探究のプロセスを体感できるようサポート体制の充実を図る。 | ・学校自己評価アンケートにおいて「総合的な探究の時間等の取り組みを通して自ら課題を見つけていく」の90%を超えている。 ・ルーブリック評価において、年度当初より「本校で育みか力をまんべんなく(具体的には5〜6つの力)伸ばすことができた」と各学期の振り返りの中に回答する生徒が各学年末には50%を超えている。 | ・外部との連携は岡山商工会議所西大寺支所を中心に少しずつ範囲を広げることができている。1年生の探究活動では、地域や外部の前期授業制度を利用し、講演会を実施する予定。2年生のプレゼン発表では外部企業を招いて講演をしてもいい、生徒へのフィールドワークを行う予定。各課と各教科との校内の連携が課題。 ・ルーブリックを用いた活動が始まったばかりで、まだまだ課題がある。指導する側もこのルーブリックを意識しながら生徒をサポートしていく必要がある。1年生は2学期から本格的にスタートするので、活用できるように各担当者に指導していきたい。 | ・1年生は、10月に外部より講師を招いて講演会を実施した。環境・観光科様々な分野から計7名の講師の方々と進化した。商工会議所をはじめ、民間企業や大学等と連携をすることができたので、今後も生徒の活動が充実したものとなるよう努めていきたい。2年生については、今年初めに、岡山支所を中心に外部より講師を招いて本発表を実施した。講師の先生方からの、的確で幅広い視野からのアドバイスをいただくことで生徒進歩の気づきや学びを得ることができた。 ・学校自己評価アンケートにおいて、「COIでの取組に対して肯定的意見の割合が90%となり昨年度並みであった。」 ・ルーブリックでの評価の達成状況は、まだ活動途中であるため3学期に振り返りを行いながら確認する予定。 | ・COI運営委員会をうまく活用でき、組織的に動いていくことができなかった。持続可能な運営にしたいために学年団や他の課との連携が課題である。 | ・今年度COIを運営していくにあたり、どういった形で進めていくのがいいのか、検討する必要がある。 | 妥当である。 | 適切である。 |
| | 学向上委員会 | ・主体的・対話的で深い学びを実現し、学向上に資する授業力向上を図る。 ・新学習指導要領実施に当たり、目標と評価の一体化について研究を深め、情報を共有する。 | ・OJTチーム研修や相互授業参観を通して授業力向上に関する課題の共有、実践を行う。 ・生徒向け授業アンケートを年2回実施し、授業改善に役立てる。 | ・相互授業参観または公開授業参観を実施した教員の割合が100%【前年度実績なし】。 ・学校自己評価アンケート「授業の進め方等に工夫が見られ、分りやすい充実した授業である」の項目のマイナス評価の割合が15%以下【R3年度16.8%】 | ・相互授業参観については、1学期に連絡したのみで準備ができていない。11月の実施を目標に準備をしておく。 ・学校授業参観アンケートについては、現在各教科に人力を割っていただいているところである。今後、各教科に結果を還元し、授業改善に役立てていただくようにする。 | ・相互授業参観については、11月中に実施していたグループによって参観に共有できていないグループと実施ができていないグループがある。 | ・相互授業参観、授業参観アンケート ・2学期以降、クロムブックで集めたデータから、特に行き止まりの授業や、そのことを周知する必要がある。分りやすいマニュアルを共有できるように工夫したい。 ・職員会議で相互授業参観の総括をする時間を取ることも必要である。 | 妥当である。 | 適切である。 | |
| 2 | 国語科 | 4技能を意図した授業と生徒が主体的に課題を見つけ学ぶ授業を展開し、留学生との交流会やイングリッシュキャンプなどの行事を通して異文化理解を深める。 | ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の評価と改善を行う。 ・1・2年生の授業や行事でChromebook等のICTを効果的に活用する。 ・地域の学校機関と連携し、留学生との交流会を実施する。 | ・観点を示したパフォーマンステストを学期に1回実施する。 ・行事や授業アンケートにおいて、「ICTを活用することで授業(行事)での英語理解が深まった」と回答した生徒の割合が70%以上となる。 ・地域の学校の留学生との交流会を年2回実施する。 | ・1・2年生の授業において、ALTと協力してスピーキングテストやライティングテストを実施した。 ・ITビジネススクレレッジと連携した留学生との交流会を6月に実施し、本校2年生が西大の魅力について紹介した。第2回は10月実施予定である。 | ・1・2年生の授業において、1・2学期ともにスピーキングテストやライティングテストを実施できた。 ・ICTを活用することで授業(行事)での英語理解が深まった。とアンケートで回答した生徒の割合は82%であった。 ・ITビジネススクレレッジと連携した今年度2回目の留学生との交流会を10月に実施し、本校1年生が日本文化を紹介した。 | ・パフォーマンステストは計画通り実施することができた。 ・1・2年生ともにクロムブックを所持しており、授業や行事で効果的に活用することができた結果、英語に対する理解も深まったと考えられる。 ・ITビジネススクレレッジとは昨年度から連携を図っており、本校生徒・留学生への活動内容についてのアンケートでも、概ねよい評価であった。 | ・今後はパフォーマンステストの学年ごとの評価基準作りを進めたい。 ・特に行き止まりの授業について研究・推進を行い、ICTを活用することで授業(行事)での英語理解が深まった。とアンケートで回答した生徒の割合が90%以上を目指す。 ・ITビジネススクレレッジとは2年度目の交流会を継続実施する。また、西大との則を実践に案内するなど、次年度に向けて各種内容をさらに工夫する。 | 妥当である。 | 適切である。 |
| | 商業科 | ビジネス活動に関する専門的な学習を深め、関連する倫徳や資力を取得し、社会貢献できる人材を育てるとともに、新学習指導要領実施の検証及び継続的な取組を進める。 | ・地域の人的・物的資源を活用して、ビジネスマナーの向上や国内外の経済事情の把握、金融・金銭教育(租税教育、商品開発を柱として)の充実、勤労精神や地域社会貢献に対する意識を持たせ、周知する。また、新しく導入された情報教育機器が活用しやすい環境を整備する。 ・新学習指導要領実施に伴う検証と継続的な取組として、現行科目及び新科目における教材・教具及び指導法の準備ができ、教員の意識も高揚し、実践に向けた準備が整う。ICT活用授業については、科内で効果的な指導法について適宜情報共有し、生徒がICTを活用し、互いの考えを交換したり、共有したりして、より効果的な研究と実践を進める。 | ・金融教育(租税教育、商品開発)を柱として、ビジネスマナーや経済事情に関する講演会等の実施及び商品販売に関する地域社会貢献活動における満足度が90%を超えている。また、行われた活動をすべての生徒に周知する。【令和3年度 88%】 ・インターネットに接続され、かつ様々な情報を処理するために必要なハードウェアやソフトウェアが整備されている。 ・新学習指導要領実施に伴う検証と継続的な取組として、現行科目及び新科目における教材・教具及び指導法の準備ができ、教員の意識も高揚し、実践に向けた準備が整う。ICT活用授業については、科内で効果的な指導法について適宜情報共有し、生徒がICTを活用し、互いの考えを交換したり、共有したりして、より効果的な研究と実践を進める。 | ・1・2年生は「ビジネスマナー講演会」(8/22、8/23)、3年生は「金融・経済・ビジネスマナー講演会」(9/14)を実施し、感想文記述から満足度はほぼ100%であった。さらに、3年生には、「ライティング検定(教育賞・金賞・賞状)・事後生産等」講座も実施計画している。生徒に合わせた金融・経済活動の一助になると思われる。また、地域貢献の事業として、課題研究「商品開発・開放講座」講師の生徒が、地元企業や関係団体と連携し「東区おたけ」プロジェクトに参加し、商品開発に取り組みした。小学校への出張講座として、「租税教室」を実施し、高校生が児童に向けて、税の仕組みを授業した。これらの関連行事は、報道や本校Webページ上、商業科授業、校報掲載等で紹介した。 ・図書情報管理係や事務室と連携しながら、情報教育機器の安定稼働に努めた。連携、稼働は順調である。 ・年間を通して、商業に関する学校外の研修に教員が参加し、最新情報を取り組んでいる。ICT活用授業については、タブレット端末を活用し、リモートで授業をした教員は100%である。 | ・地域の人的・物的資源を活用した各種講演会や地域貢献活動への満足度は高いと言え、校外での活動取組も、生徒自身のキャリア形成に大きく役立っている。今後も継続した取組を進めていきたい。 ・情報教育機器の安定稼働に努めた。連携、稼働は順調である。 ・商業科目は、いくつかの分野(大きく4つの分野)があり、学校外での研修会の資料や成果を、資料回覧や担当者間研修、資料整理等で共有することができた。また、岡山県商業教育研究会にも多くの商業科教員が参加し、最新情報を取り組んでいる。日々の教材研究、授業展開、進路指導等に大いに役立っている。 | ・地域の人的・物的資源を活用した各種講演会や地域貢献活動への参加は、校内で体制づくりにしっかりと取り組んでいる必要がある。 ・情報機器更新など、新たな構想に向けた準備及び運用は、関係機関や関係団体と連携しながら今後も進めていく必要がある。 ・商業科目は、いくつかの分野(大きく4つの分野)があり、学校外での研修会の資料や成果を、資料回覧や担当者間研修、資料整理等で共有することができた。また、岡山県商業教育研究会にも多くの商業科教員が参加し、最新情報を取り組んでいる。日々の教材研究、授業展開、進路指導等に大いに役立っている。 | 妥当である。 | 適切である。 | |

| 進達システム 経路 目標 の 番号 | 課・学科・ 学年等 | 具体的目標 | 具体的計画 | 達成基準 | 中間期 | | 年度末 | | 学校関係者評価 | | | | | |
|-------------------------------|--------------|---|--|--|--|-----------------------|-----------------------|---|--|-------|--|---|------------------|-------|
| | | | | | 達成状況 | 個別評価 総合評価 | 達成状況 | 個別評価 総合評価 | | 結果の分析 | 改善のための方策 | 評価の 妥当性 | 改善方 策の適切 さ | |
| 2 | 1年 | CCTにおける進路研究や探究活動、また社会貢献活動等の様々な活動を通して社会性や規範意識を養い、自己肯定感を高める。 | 大学訪問や出前授業、CCT等においてchromebook等を活用して情報収集・分析を行い、学問や進路についての理解を深め、興味を広げていくとともに、自己の生き方について考えさせる。 | 学校自己評価アンケートにおいて、「将来の進路や生き方について学習する機会がある」の項目に肯定的に答える生徒の割合が85%以上になっている(R3年度83.6%・1年生のみ)。 | ・夏期補習中も含めてCCTの時間には、主にchromebookを使って学問や自分の進路について考える時間は確保できた(コロナの影響を受けた生徒はいるが)。学年集会等で大学研究(大学訪問等)を勧めているが、さらに深化させるために引き続き、大学訪問やボランティア等の企画に参加するよう指導する必要がある。 | B | B | 学校自己評価アンケートの【将来の進路や生き方について学習する機会がある】の項目については、96%(1年のみ)が肯定的な評価をしている。 | B | B | 1年次のCCTの時間の前半を進路学習、後半を探究学習として十分な時間が生徒に提供できていることがこの結果につながっていると考えられる。 | 進路研究については、知識不足等しっかりと深く考えていける状況でない生徒も多い。今後CCTは探究活動が中心になっていくので、進路LHRだけでなく担任面談、教科面談等で個に応じたアドバイス等も必要になってくると思われる。 | 妥当である | 適切である |
| | 2年 | Chromebook等のICT機器を効果的に利用することにより家庭学習習慣の定着を図り、生徒の学力の向上を目指す。 | ○Chromebookによる課題配信、予習・復習の指導等を通して、家庭学習時間を確保させる。 ○週末課題や小テスト、補習、土曜講座等を通して基礎学力の定着を図る。 | ○進研模試の国数英総合・5科総合の平均点偏差値がいずれも48.0以上になっており、国数英総合・5科総合の偏差値50以上が70人以上、60以上が5人以上になっている。 【現状】現2年の進研模試の国数英の平均点偏差値は11月が48.4、1月が50.1である。11月は50以上が71人で1月は102人、60以上が11月は4人で1月は5人である。 ○情報処理検定と簿記実務検定における1級合格者が50%以上、全商英語検定1級合格者は7%以上となっている。 【現状】現3年の情報処理検定と簿記実務検定は昨年度は9月の時点合格率40%を超えている。英検については合格率9%と例年に比べるとかなり高い。 | ・国数英において定期的に週末課題を課している。また教科によってはスタディサプリの配信や放課後の補習等を行い基礎学力の定着を目指している。成績で学習時間を行比較したところ、平日平均はどの層も2時間程度となっているが、成績上位層と下位層では休日の学習時間に50分程度の差が出ている(進路指導係調べ)。全体的な学習時間の確保が必要であるが、特に、下位層の休日の学習時間の増加・定着を図れるよう指導していきたい。 | B | B | 11月の進研模試の結果はまだ届いていないが、7月の進研模試の国数英総合の平均点偏差値、またの平均点偏差値50以上の目標値は達成できている。平均点偏差値50以上の人数は昨年度の人数の8割程度に留まっている。 情報処理検定・簿記実務検定は1月に行われるが、1級合格者は50%を超える見込みである。全商英語検定1級の合格率は7%を超えることができた。12月に行われる検定では合格者を増やしていく。 | B | B | 英語科はクラス対抗英語テストや英検クラブ、数学科は独自の問題集を作成・放課後補習を行うなど、各教科が工夫を凝らして生徒のやる気を上手に引き出している。その成果が現れつつあると考えられる。また、家庭での学習時間の増加には繋がっていないのが現状である。 | 目的や目標が明確にすることが学習意欲に繋がっていると考えられるため、クラスでの雰囲気作りが重要である。進路指導課の分析によると、どの層位層も学習時間が減少しているが、継続することにより成績が伸びている生徒もいるので、個々の指導もしっかりと行っていく。 | 妥当である | 適切である |
| | 3年 | 主体的対話的で深い学びの実現に核とし、ICT機器を効果的に利用することで、生徒の学力を向上させる。普通科・国際情報科は進研模試の成績、商業科は検定合格率をそれぞれ向上させる。 | 授業(予習・復習)や課題の指導、小テスト、検定補習、土曜講座、ICT機器の活用の促進 | ・普通科・国際情報科は、進研模試の国数英総合・5科総合の平均点偏差値がいずれも48.0以上になっており、国数英総合・5科総合の偏差値50以上がそれぞれ45人以上・35人以上、60以上がどちらも3人以上になっている。 【普通科・国際情報科 進研模試 R3年度平均点偏差値5回平均(国数英総合46.0、5科総合45.0) R3年度 偏差値50以上5回平均(国数英総合42人、5科総合32人) R3年度 偏差値60以上5回平均(国数英総合2人、5科総合2人)】 ・商業科は、全商情報処理検定・全商簿記実務検定における1級合格者が50名、全商英語検定10人になっている。 【商業科 R3年度検定合格者3カ年合計 全商情報処理検定1級45人、全商英語検定1級9人、全商簿記実務検定1級48名】 | ・普通科国際情報科 進研模試5回(6月7月、9月、10月、11月)平均 ●国数英総合：平均点偏差値49.2 偏差値50以上84名 60以上13名 ●5科総合：平均点偏差値48.0 偏差値50以上69名 60以上10名であった。 ・商業科の検定結果 ●英語系(全商英検)1級合格者26名 ●商業系(簿記)1級合格者24名、情報処理1級合格者48名 ※検定は12月末現在の結果で、1月の検定で最終決定 | A A A A B | A A A A B | 「平均点偏差値については、例年受験日に受験していない生徒(概して平均点を下げる生徒)がいるが、本学年は受験可能生徒全員を集計に入れている点(参考：10月進研受験者は、昨年度161名、今年度受験者181名)」。各層偏差値及び5科総合の偏差値の向上を目標に掲げても、目標の達成にいく状況が生まれてくる。しかし、本学年は進路志望においてできるだけ国立公立大を目指させてきた。また、科目を勝手に取捨選択しないこと(受験は団体戦)というテーマのもと層別と協力(配慮)して学習に取り組むことの必要性を振り返り説明してきた。商業科においても、力を合わせて検定に合格する雰囲気を作ってきた。それらが実を結んでおり、結果だけでなく過程も含めて次の学年に活かせるような指導ができたと考えている。これを次年度に活かすことで、学校全体へ貢献していきたい。 | 普通科国際情報科において、数値的には目標を達成しているが、個々の生徒の進路実現に向けて最後の指導にあたりたい。なお、平均点偏差値及び5科総合の偏差値を下げる主たる要因は、受験科目として地歴公民や理科と数学を必要としない生徒(主に文系私立大・短大・専門学校志望の生徒)である。その場合、平均点偏差値及び5科総合の偏差値の向上を目標に掲げても、目標の達成にいく状況が生まれてくる。しかし、本学年は進路志望においてできるだけ国立公立大を目指させてきた。また、科目を勝手に取捨選択しないこと(受験は団体戦)というテーマのもと層別と協力(配慮)して学習に取り組むことの必要性を振り返り説明してきた。商業科においても、力を合わせて検定に合格する雰囲気を作ってきた。それらが実を結んでおり、結果だけでなく過程も含めて次の学年に活かせるような指導ができたと考えている。これを次年度に活かすことで、学校全体へ貢献していきたい。 | 妥当である | 適切である | | | |
| 3 | 総務課 | ・各科、課、教科等との連携を深め、小中学校に向けた広報活動の充実を図る。 | ・オープンスクール、学校説明会等を通して中学校の先生方や中学生・保護者に本校の教育活動について正しく理解してもらえよう工夫を行う。 | ・実施後のアンケートにおいて「本校の教育活動についてよく理解できた」がそれぞれ70%を超えている。(R3:82.2%, R2:未実施, R1:69.1%) | ・本年度のオープンスクールも昨年度と同様の形式(施設見学・部活動見学は実施)で行った。コロナ禍であったため、欠席者が多く、昨年度より大幅に参加者は減ったものの無事に実施することができた。アンケートの集計・分析は今進行中。また、SNSによる学校の発信もスタートし、じわりとフォローも増えつつあるので、合わせて広報していきたい。ただ、校内での運用体制が課題。 | B | B | ・オープンスクールアンケート集計によれば、「学校や学科の様子がわかり大変よかった」と答えた割合はR4:81.5%、R3:58.6%と大幅にアップした。また、昨年に続き10月には学校説明会を実施し、216名の生徒・169名の保護者が参加した。SNS(ツイッター)を使った広報活動も8月より実施し、じわりとフォローも増えている。 | B | B | 広報活動が志願者数や入学してくる生徒の状況にどう影響しているかは長期的に分析をする必要がある。この段階では明確にはわからない。SNS(ツイッター)については、総務課内での運営がもっとスムーズになよう、速やかな発信ができるよう工夫をしていきたい。 | 妥当である | 適切である | |